2020年
12月7日
月曜日

ニースの「物乞い」

藤田　友尚　教授（フランス語・フランス文化・文学）

あるラジオ番組で、小説家の高橋源一郎が、一度会っただけなのに強い印象を残して、しかしもう二度と会うことがない人、そんな人がみなさんにもいませんか、と問いかけていた。

この話を聞きながら、私にも強く印象に残った人がいることを思い出した。それは、私が何十年も前、フランスのニース大学に留学しているときのことだった。

学生寮を出て散歩していると、背後から呼びとめられた。振り返ってみると、みすぼらしい身なりをした50歳代ぐらいの男性の「物乞い」がいた。

フランスでは今でも「物乞い」をよく見かける。道ゆくフランス人は彼らにはまったく関心を示さない。そのそばを通りすぎてゆくだけだ。だからこの男性は、私のような外国人に声をかけた方がお金を恵んでもらいやすい、そう考えたのだろう。

ところで、このニースの「物乞い」に声をかけられた時、今思うと自分でも思いがけない反応をしてしまった。その男性に硬貨を手渡しながら、とっさに質問してしまったのだ。「なぜこんな風な状況になったのですか」、と。

相手も、まさかアジア人の若者からこんな質問を――しかも、ぶしつけな質問を――受けるとは思っていなかったのだろう。一瞬、意表を突かれたような表情になったが、すぐさま気を取り直して私の質問に答えてくれた。

以前、自分はパリで働いていたが、糖尿病になり働けなくなってしまい、失業。それがきっかけで妻との夫婦仲もうまくゆかず離婚、家族を失い、放浪することに…。珍しい話ではない。ただ、もうあれから何十年と経っているのに、いまだに時々思い出される。なぜか記憶に残っているのだ。

なぜ印象深く思い出されるのか。

おそらくそれは、フランス語をしゃべるという「心の構え」が原因だったのではないか。私の場合、フランス語で話をする時は、できるだけ明晰に考え、明快にストレートに相手に伝えることを意識している。率直な「物言い」、はっきりとした意思表示が重要だからだ。フランス語をつかうときには、このような「心の構え」になっている。そしてこの「心の構え」を通じて、日本語で表現したことのない未知の自分が突然現れてきた、という印象があるのだ。そのような「構え」の切り替わりが、咄嗟にあのような質問をさせてしまったのだろう。

ところで、この「物乞い」の男性とどのように別れたか。別れ際、彼は私の渡した硬貨を見ながら、「金額の多い少ないは問題ではない。しかし、私の話を聞いてもらえたのが嬉しい」、そう言いながら握手を求めてきた。社会から〝落ちこぼれ〟となって生きている今の状態は、決して自慢できるようなことではない。しかしそれでも、自分が主人公として生きてきた人生は自分にしか語れない。世界にたった一つの物語だ。それを聞いてくれる人がいるというのは、ずっと無視されながら毎日を生きている「物乞い」の男性からすれば、他人から少しでも関心を寄せてもらえることであり、彼にとって慰めになったに違いない。流行りの言葉で言えば「承認欲求」とでもいえるだろうか。

この男性と握手していると、通りがかりの老婦人がチラリとこちらを見たのをよく覚えている。きっと奇妙な光景だったに違いない。■